
ウィザード うえざーど ~ ~ ~ 茜色の予報師さん ~ ~ ~

ちくは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザード うえざーど ～～～茜色の予報師さん～～～

【Nコード】

N8105D

【作者名】

ちくは

【あらすじ】

何時ものように学校をサボり、街をふらつく俺はある日奇抜な格好をした観光客と出会う、俺の人生を変える二日間の茜色の予報士と俺との物語。

茜色の観光客（前書き）

長くはならないハズ（・・・）

茜色の観光客

荒れ果てた広野とチリチリと地面を焦がす日差し朽ち果てたその土地はどこまでも静寂と言う般に閉じ籠ったように静だ。

ここはかつてシグマと新・国連との開戦の地、そして雨の降らない不思議な土地

復旧しはじめた街並み、戦闘の後はまだ癒えないが町は活気ずき人の賑わいが耳に入ってくる。

「今日は当たりは無いのか……」

平日の昼間に少年が街を彷徨くのは異様、人の目を惹き付けるのは当然のだが今日に限って不思議と気にならない。

回りを見るとみんなは何かを見ている、気になり野次馬に紛れ込み様子を伺う。

「変人か？ それにありゃリックにスロバーじゃねえか……」

どうやら揉め事の用だ同じ高校の不良リックとスロバーはつい最近退学になったばかりの奴だ、そしてポケットと二人を見上げているのは東洋人の少年だ、その少年は奇抜だ雨の降らないこの土地で茜色のカッパに茜色の傘をせよっているその傘は異様に大きく二メートルはある長さだ。

「てめえ！ 英語しゃべれねえのか！ 感謝料払え！」

痺れを切らしたリックが手に持つナイフで切りかかった！
アブねえと飛び出そうとする前にドスと鈍い音が響きリックがドサ
ツと倒れる。

「誰か日本語わかる人いのかなー？通訳のお願いしたいかなー？」
リックをスロバーに押し付け回りに呼び掛ける……どうやら俺しか
日本語が分からんらしい。
溜め息を付き俺が出ていく。

「通訳してやる、今日は当たりの用だしな」

「じゃあ、頼むかなー」

それは聴くにも絶えない罵声を浴びせる少年、と其を通訳する俺……
正直きついで。

「ふう〜、ありがとかなー、君名前は何かかなー？」

「ああー、俺はフライディオ・アマダだ、アンタは？」

「僕様は赤羽 天だよー」テンそいつはそう名乗ったしかしこんな
治安の悪い街になんの用なんだ？

しかもこんな子供が、一人考えこんでいると服をグイグイ引っ張ら
れる、つい考えこんでしまうのは悪いくせだ。

「ねえー君これ、見たことないかなー？」

「これって？シグマの奴等が持つてる隕石？じゃねいか」

「知ってるの？案内してほしいかなー？」

コイツは何を言っているだ……死に行くもんだ。

「ダメダメ死にたいのか？」

「死にたい分けなかなー、僕様は此が要るんだー、ねえお礼は弾

むかなー」

「うつせい！はなせー！俺は死なん！」

百六十半ばの少年は俺にくっついて離れない。

不毛な闘いは人目を引くが幸運にも放してくれた。

「お腹すいたあゝレストランに行きたいかな？奢るからついて来て欲しいかな？」

「はあ……なんなんだよまあ、タダメシにありつけるのはラッキーだぜ」

何はともあれこのガキを連れてレストランに来る、騒ぎそうな態度だが意外にも大人しくメニューを見て俺に伝える、其を通訳しヘラヘラと笑う顔を引き締め俺の顔を黒い笑みで見る。

「さっそくだけど、君の知っている事を話しほしいかなー」

「隕石の事か？対した事は知らないぜ？」

水を飲みながら聞いてくるテンそれを聞いてもピクリとも反応しない。

「言い方を替えようその隕石のある場所とシグマの護衛の位置、調べてくれるかなー？」

「なんで俺に？」

「んー日本語ができるからかなー」

なるほど、簡単な理由だのだが断る！！俺はまだ死にたくないいな！

「取り敢えず前払いで100万で成功報酬に200万でいいかなー？」

「……………」

「いいかな？」

「わーっただよ！」

ちくしょう！バカバカ金の魔力に負けたー！

さすが日本人！金持ってやがる！

「さあて、宿を探すかなー」

「お、おい頼んだメシはどーすんだよ」

先に来ていたオレンジジュースを飲み干し傘を背負い店を出ようとする。

「んー好きにどうぞー、僕は宿をさがすかなー」

「……………てめえ日本語しかわからなねえだろ？」

あっー！そうだったと傘を引きずりながら席に座り直す。

「家に来いよ民宿なんだ、部屋は狭いが料理の腕は保証するぜ、それにお前は当たりみたいだしな」

「当たり？」

「面白いことが起こりそうってことだよ」

食事を済ませ家にいく、奥には親父が料理の下ごしらえをこなし雑誌を読んでいる。

「ただいま、客連れてきたぜ」

「おう！なんだ坊主家出か？」

「違いますよー観光ですよーそれに僕はテンと言っ名前ですよ」

相も変わらずヘラヘラとした表情を緩めることなくチエツクインの手続きをするふとパスポートが落ちる、それを拾ってやるたまたまみた中身に驚愕した。

「に、28ー！？！その成で？10も歳上なかよ？！」

「へえ？言わなかったけ？」

予報師とハツカー

テンに部屋の鍵を渡し、さっそく話を切り出す。

「で、さっきの話はマジなのか？冗談だろ？」

「ん〜おおマジだよ、だいたいでいいかなー……あとは僕様がやるしね」

旅行用のトランクを置き中からパソコンを取り出す。

「やめとけて、ただの観光にしとけよ」

「大丈夫かなー、僕強いしさ隠密行動でいくし、だから情報が欲しいかなー」

パソコンを閉じ、部屋をでる。

「さあ情報収集かなー、午前5時に協力者から援護がある、君の情報が必要なだよー天才ハツカーくん」

「な、なんのことだ？」

ドキリとする……こいつ俺を知ってるのか？
またも考えこんでしまい服を引っ張られる。

「さあ日がくれる前に話を聞きにいくかな」

「ああ、わーっただよ」

街の連中に手当たり次第に聞きまくるテン……だから英語で話し掛けないと通じないって……。溜め息をつき、また通訳をする喉が渴れそうだ。

「ねえー」

「なんだよ?」

「なんでジューズがこんなに高いのかなー?」

「雨が…:降らねえからだよ、まあ水の配当はちよくちよく来るからなこの時期は少し高いな」

ふうーん、納得した様子で街を彷徨く。

ある程度の聞き込みを終えて満足したようだ、鼻歌を歌いながら家に帰る。

たく、こっちは疲れたっーの。

「くっはは!なかなかいけるクチか!ほら」

「おっと!親父こいつももうダメそうだぞ目が虚ろってる」

「まあーだ、だああいじょうぶう、へへ」

薄ら笑いから表情が殆んど変わらないから親父はキョトンとし小さく笑う。

「つれてってやれ、片付けは俺がやるから」

「おっ」

テンを背負い二階にあがるテン以外は客は停まってない経営難だ、はあ。

そしてこの傘、無駄に重いぞ、ちくしょう。

「ほら、潰れるまで飲むなよな」

「……さあ、仕事を初めてくれフラディオ君」

ビクツと体が震える、テンのおどけた口調が冷たくなった。

「そんなに身構えないでほしいかなー、そのパソコンは協力者に出来る限りの技術を積み込んで貰ったかな……」

「俺はパソコンはさわらねえ……無理だよ」

「逃げることは許さない……オレはチャンスをくれてやる為に来た」
「ちや、チャンス？」

冷や汗を拭い深く息をすい問い掛ける、薄ら笑いのはずの表情がとでも残虐に見える。

「そつだよ六年前のケリをつけよう」

「お前は……なんなんだ……いや、わかったそれでケリがつくなら、やってやる！」

「うん これで一安心かなー……僕は寝るかなー」

そう言い残し恐ろしく寝付きの良さで寝てしまうさすがにカッパは着ていないが傘はだきまくらの様に抱えて寝ている。

「ふう〜二度と触らねえつもりだったのに……まさかテンが軍人だったなんてなしかも偽名、タグ隠せよ」

この少年のような男は恐らく六年前の大規模な掃討作戦の生き残りだろう……当時の俺は確かに天才ともてはやされたしかしハッキングの未熟さと己の愚かさのせいで軍の情報を流出させシグマに敗退した。

「いつそ、罵ってくれた方が気が楽だぜ……なのに償いのチャンスを与えるか……なら答えてやる！今夜は“クスイー”大復活祭だ！」

ノートを開き立ち上げる、さすがあつという間に起動しカリカリの音が少ない。ざっとスペックを調べたら今の最新機器の二三第さき

の性能に達しているだろう……なんて奴だ。

「参ったな……俺なんかただの凡人だ……っとメール？」

一旦自分の部屋に戻り自分で作ったフリージアと名をつけたプロゲラムが入ったトートバッグを持ち端末に差すと同時にメールが来る。

『起動したということは、無事にクスイーと出会えたようだな、予定どおり作戦を結構』

「……する、イロハ　スギモト……コイツが協力者、っと、さあて始めるかあ」

指が一瞬震える、そして触れる……六年さわって無くても精密にかつ俊敏に。

「なかなかのプロテクトだ、だがフリージアの敵じゃないな」

データを閲覧し情報を集める足跡を残さずクラックするのは朝飯前だ後は監視カメラのシステムに侵入し敵の目を奪う下準備をしておえた。

仕事に時間がかからないがフリージアの改良するのに時間がかかり気付けば4時半だ、疲れた。

予報師とハツカー2

肩を自分で叩き、背伸びをするとテンがむくりと起き上がる。低血圧ではないようで、すぐに起きれるのは羨ましい。

「おはよ〜」

「ああ、仕事は終わったぜ」

「ご苦労様かな〜、よし……さすがフラディオくんかな〜」

顔を洗い何時もの薄ら笑いを浮かべカツパを着込む、さらにトラクから小型の銃と二本のマガジンを腰に装備し脇のしたにナイフを左右に隠し傘を背負う。

「準備完了！じゃあ行くかな〜」

「待てっ！まだデータを頭に入れてないだろ！チラツと見た程度じゃダメだ！」

人がせつかく調べたデータをチラツと覗いて出ていこうとするテンを止める、俺の苦労が水の泡になるところだ。

「大丈夫かな〜全部覚えた」

「はあ?!」

「僕は瞬間記憶能力者って奴らしいかな〜だから大丈夫！」

「……お前、実は凄かったんだな羨ましいよ、そんな特技があつて」
「純粋に驚き、羨ましいと思つたがテンは」

「そんなことないよ」と悲しみを一瞬顔に現した。
「がすぐに元にもどり扉を開ける。」

「ありがとう協力感謝かなーじゃ」

「ああ、こんな俺を必要ならいつでも頼ってくれよ！あと、警報がなると同時に監視カメラが停止するウイルスを流してあるからな」

「それは助かるかな、じゃあいつてきます」

「ちよつと待った！俺も行く」

「ええ、ジャマ」

「……はつきり言うな傷つくぞ」

こいつ口悪いな、テンはやれやれと首をふり銃を一丁俺に渡した。

「君は遠くで見てること！これが条件かなあと、ついでに僕の間となつてもらうかな」

「オツケー、ナビは任しとけ！」

PCを畳みリュックにしまい、テンから拝借した通信機を取りだしポケットに詰め出発した。

街から五キロほど離れた荒野に佇むシグマの基地回りには敵のMGが待機中だ。あれに触れる奴はちよつと羨ましい。

「はあはあはあ……テン、待ってくれ」

「しっ！伏せて、しばらく様子見かな」

小さい癖にやたらと足が早く、五キロを息切れせず、しかも汗を一粒もかかずに走りきってるバカみたいな体力だな。

「フラデオくん、時計」

「ああ、ほら」

時計と紫色の空を交互に眺め、薄ら笑いが一瞬、鋭い目付きになる。

すると突然MGが爆発を起こし倒れる、
ビームだ後方から矢の用な形のビームがマテリアル・ギアを撃ち抜く！

「来たね陽動は任せた！フラディオくん！行くよ！」

「お、おう！つおおお！」

リュックを背負うと同時に腕を捕まれ風を切る音と共に浮遊感を感じる？

目を開けるとテンに抱えられている、そしてあっいうまに近くの岩場に下ろされた。

「ナビは任せた！」

「つあ！わ、わかった！」

いきなり下ろされたから腰を強打し痛い、テンはグッと傘の塚を握りすごい勢いで走り出す！

俺はそれを見送りPCを開く画面を見易いように顔の近くに持って、通信機に手をかける。

「うお？！こ、こええええ！」

間近で戦争が起こられているのだ、爆風や破片が飛び散る。
しかも攻撃しているのがたった2騎だけだ、大丈夫なのか？

「つて！見てる場合じゃねえ！……なんだよテンの奴は順調すぎるくらいだ」

『フラディオ！防衛システムの破壊とE4の扉のロックの解除！早く！』

「お、おう！」

テンの怒声が通信機から響く耳が痛いぞクソ！

素早くハックを開始しロックとセキュリティを外す。

「おいおい！あの数を引き付ける気がよ？」

30騎はあるマテリアル・ギアを徐々に後退しながら迎撃する白いMGとトンボの羽の用な羽を持つMGはやがて見えなくなる。

「ふう〜助かった」

『見つけた！……っあ？！』

「おい！どうしたテン！……切れた」

耳障りな音と共にテンの声が途切れた。

茜色の予報師との旅立ち（前書き）

テンの能力は続編で明かされる予定です！
時になるか分かりませんが（汗）。

何

茜色の予報師との旅立ち

通信機が貫かれ僕の手から離れる、床にも12本の切れ目が走り赤い体液が溝に溜まっている。

僕は本能的に傘を開く！

すると12本の光の剣が傘にぶつかる。

「あれ？君は誰かな？」

「……………」

「鬼ではないな……………狩人でもないし」

狐の面から楽しそうに喉を鳴らす白いコートの少年は次の攻撃を仕掛けてくる、それを交わしナイフを投げつけて壁を背に隠れた。

「っ……………あーあ、また幽弥に怒られる」

「……………！」

ヤバいと感じ、前のめりに倒れるすぐ真上を灼熱の黒い火柱が通り過ぎる。

「エミティか……………いや、違うな？」

「お前は鬼？初めてみた！だったら！」

ぶつぶつ言ってる狐面に向かって銃を乱射する、一応持ってきた対魔用の弾丸だ油断していたのか全弾命中し体から白い煙が出るがまるで効いてない。

「それじゃ僕は殺せないよ？」

「むむ！お前も僕と同じ目的なのか！」

「起源石……前は狩人側に持っていていかれたからね」

カプセルと機械が隕石を守っているそれを見ながら、今度は黒い水晶が左右から弾丸のように飛んでくる。

「なんのー！とりゃあ！雨霞！狐面に落ちるでしょう！」

「なんだこの感じ？」

突然天井を黒い雲が覆い、氷河激しく降り注ぐ！

狐面は冷静に黒炎でなぎはらい蒸発する！

「今だ！雷！」

部屋一帯に落雷が落ちる、蒸発した氷河は直ぐに形を戻し避雷針の役割をはたし狐面に雷が落ちる！

「まだまだ！雨！」

「く！」

今度は部屋中を雨が降りしきり周りを濡らす！
ぐらついている狐面に僕は傘を打ち付ける。

「五トン分の水の重みだ！食らえばひとたまりもないぞ！氷柱！」

「なに！？早い！」

狐面の周りだけ鋭い氷の刃が襲いかかる！
それを避けることはもう予報済みだ、

雨が傘に集まり鉄砲水を喰らわせてやった。

「やってくれるね……不思議な力だ天候を操れるのか？」

「話しには聞いてたけど……無駄に頑丈だな、嵐！」

あれだけの質量を加えた攻撃は狐面に膝をつかせる程度しかダメー
ジを与えられていない。

「……斬撃ときどき黒炎が発生するでしょう！防御の準備をお忘れ
なく！」

「！くっ！」

嵐のおかげで狐面の動きは防がれている、傘を開き風にのるそして
嵐の勢いを乗せて叩き込む！

予報通りの攻撃を全て行った狐面に攻撃が決まる！

「……成る程、予知？か何かの類いの能力だな、欲しいなその力」

「！???予報が外れた！」

特殊合金製の傘の直撃を受け施設の殆んどは崩壊寸前だ、なのに平
然と立っているのだ！

「左手はダメか、今日は退こうかな茜色の少年」

「待て！それはおいてけよ！」

狐面がガラスケースを破壊し二つある隕石を持って行くこととする。

「君には扱えないものだよ？それに君……その能力は強力だけど多
様は避けたほうがいいね」

「くっ！」

「それにもう動けないだろ？」

「つつ！なんで予報は完璧な筈なのに」

いつの間にか狐面は目の前に表れるそして頭を捕まれた、全身の出血が酷い全く見えなかった。

「君はいい色カラーをしているね、生かしておいてあげるよ、熟してから喰ってやる」「あつ何をした！あ！待て！」

狐面は黒い炎に包まれ消えた……完敗だ、舐めていたほかの種族とは訳が違う。ぼんやりする頭を振ると石が擦れる音がしシグマの施設は斜めに切り裂かれていることに気付く。

「……本気にすら為らなかったのか……くそ」

「おおお！こええ！死ぬ！」

「！フラディオ？なんでここにいるのかな？」

瓦礫を全て弾き、フラディオを抱えて外に飛び出したヒョエーと奇声を発するフラディオ君と共に地面に着地する。

「どんな脚力してんだオメーは！軽く五メートルは跳んだぞ?!しかも俺を抱えて！」

「あはは！僕もビックリだよ……任務は失敗か……はあ」

「たく、心配したぞ施設から雷やら霰やら光が飛び出て周りの物を切り裂くは」

「ごめん、さあ帰る！」

そろそろ、戦闘が終わるころだ撤収しないと軍に見つかり面倒な事になる。

傘を背負って立ち上がる、心なしか体が軽いし感覚が研ぎ澄まされている、こんな感覚……歩兵訓練で虎と一騎討ちをした時以来だ。

「あ！テンこれ、なんか狐の面を被った奴がくれたんだけど」

「起源石?!クソ〜ム力つくかな」

フラディオの手には半分に割れた起源石が握られている。
あの狐め！と頭にくるが取り敢えず任務は終了したしあのまま闘つても負けていた。

「今度は負かしてやるかな！」
「なに怒ってんだよ、帰ろーぜ」

3日後。

「お世話になつたかな」
「おう！また観光に来いよ！」
「……………」

3日間で様々な観光地を回った、テンは相変わらずのおバカぶりで厄介なことばかりを起こしてくれた。

「どうしたの、フラディオ君？」
「……………なあ？ついて行きたいって言ったらどうするよ？」

テンは浅くため息を吐き、真剣な顔で俺を見据える。

「オレの仕事は危険が付き物なんだ、今回みたいに異形の者との戦闘になる場合もあるし、初めて闘った鬼に手も足も出なかった」

「……………そうか、まあ俺がいても」
「でも、一人は寂しいからよろしくね！」
「は？いいのかよ！」

ダメかと諦めようとするを手を取り握手をされる。顔をあげるとヘラヘラ笑いながら喜ぶテンが映る。

「実はオジサンに頼まれてたんだよ」

「親父にか？」

「そうだよアマダ・テルヒト大尉殿にね、だから大丈夫！」

店を見ると手をヒラヒラと降る親父が俺の荷物を片手に待っている。

「ほれフラディオ！行ってこい！しっかり世界を見てこいよ、店は閉めて軍に復帰しなきゃならんようだしな！俺の心配はするなよ」

「ああ！行ってくるぜ！」

これから始まる俺と茜色の予報師との不思議な物語が始まる、テンの能力に異形の存在そんな事は知ったこっちゃない……俺はテンと世界を見ていくだけだ。

茜色の予報師との旅立ち（後書き）

次回、茜色の予報師VSカラー使いに続く予定です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8105d/>

ウィザード うえざーど ~~~茜色の予報師さん~~~

2010年10月28日05時34分発行